

# 書く実践の意義に関する一研究

## —「ふだん記」を対象として—

川原健太郎

キーワード：「ふだん記」、橋本義夫、書く実践、ライフストーリー、メディア

**【要 旨】** 本研究は書く実践の意義に関する研究である。研究対象は、八王子の実践家・橋本義夫（はしもとよしお、1902年－1985年）により創始された書く実践、「ふだん記」（ふだんぎ）である。「ふだん記」は1960年代後半に始められた庶民の文章執筆運動であり、活動期間は50年に亘る。本研究では「ふだん記」の文友（「ふだん記」の書き手の名称）4名を対象にしたインタビューによる語りとそれぞれが執筆した「ふだん記」の文章を対象にし、これらの分析を通じて、「ふだん記」という書く実践が、人生の中で書き手にもたらした意義に関して明らかにすることを目的とする。

1. では関連する先行研究を概観しつつ、「ふだん記」を人生との関わりから分析するという本研究の視角に関して論じた。2. では「ふだん記」の概要と、本調査の概要を論じた。これらを踏まえ3. では4名の文友を対象にしたケーススタディを行った。

本研究においては、病気や生活環境の変化などそれぞれ何らかの人生の転機に直面しながら、「ふだん記」という書く実践に出会い、自己肯定感の獲得や前向きな心の変容、社会的孤立からの脱却、故郷とのつながりなど書くことでさまざまな変化がもたらされていることをみることができた。また、書き手は家族史も含めた自分史を綴ること、他者への思いを書くこと、郷土史を綴ること、故郷のことなどさまざまな文章を発表しているが、いずれの書き手も出会った書く実践の場において得た、書くことへの渴望をみいだすことができるものである。今回取り上げたケースから浮かび上がった、各人が書く実践と出会い書くことで変化した変容は、今後の書く実践の意義の考察に示唆を与えうるものと思われる。

### はじめに

本研究は書く実践の意義に関する研究である。書く実践は社会教育・生涯学習の場においてさまざまな形で取り組まれてきた。戦前には生活綴方などの実践、戦後では共同学習における生活記録や自分史などの実践があり、さまざまな形で行われてきた。書く実践では文章を書くことに加え、書かれたもの詳察や意見の共有・学び合いなどが取り組まれてきた。

近年の書く実践を取り巻く環境を鑑みると、デジタルツールの発展に伴い、執筆から共有までの障壁が下げられ、より多くの人々が自由に書き、語るができる環境が整ってきつつあるように思われる。これまで以上に多くの人々が書くことが可能になりつつあるが、そうした現況の中、書くことが人間にとりどのような意義をもつのか考察することは重要であると思われる。そこで本研究では書くことの意義を具体的な実践から実証的に考察する。特に執筆者の人生を通観しつつ、書くことが人の人生のあゆみにどのような意義をもっているかの観点から研究を行いたい。

研究対象は、八王子の実践家・橋本義夫（はしもとよしお、1902年－1985年）により創始され

た書く実践、「ふだん記」（ふだんぎ）である。「ふだん記」は1960年代後半に始められた庶民の文章運動であり、ふだん“ぎ”の名が示すようにいわば普段着のように自由に書き、出版する実践である。その特長には創始者である橋本義夫の理念があり、「私でも文章が書ける、書けない者なし」、「下手に書きなさい」を掲げる、万人が文章を書けるようにすすめる実践である。「ふだん記」ではエッセイや詩なども含め、さまざまな文章が執筆されているが、最も中心となるのは執筆者自らの来歴、すなわち自分史である。「ふだん記」では書き手が自らのことを書き、機関誌等に掲載し読み合い交流する。それぞれが書いた文章を通じ、読み合いや文通などの活動が行われているのである。

ここで「ふだん記」を対象にした理由は2点ある。第一は「ふだん記」が全国に広がっており、多くの機関誌や「ふだん記」本（「ふだん記」の執筆者が出版した書籍）の存在など実践の蓄積があること、第二は「ふだん記」の活動期間の長さである。1960年代後半頃から活動が行われ橋本義夫没後の現代もなお続くなど活動期間は50年に亘る。そのため、執筆者の長い人生の関わりから長期的な視野での影響をみることができると思われるためである。

主な調査データは「ふだん記」の文友（「ふだん記」の書き手のこと）4名を対象にしたインタビューによる語りとその文友たちそれぞれが執筆した「ふだん記」の文章である。研究方法は、4名に対するライフストーリー・インタビューの分析と機関誌などに掲載された文章の文献調査である。本研究ではこれらの分析を通じて、「ふだん記」という書く実践が、人生の中で書き手にもたらした意義に関して明らかにすることを目的とする。

現代はICTの発展に伴いデジタルツールなどを活用することにより、書く・発表することが容易になってきた時代であるが、その傾向はますます進んでいるようにみえる。1960年代から万人の文章を掲げ、庶民が自由に書き、発表する実践を進めてきた「ふだん記」の研究は、これからの書く実践が書き手に対してもたす役割の考察に示唆を与える意義があると思われる。以下本研究では、1. 先行研究及び本研究の視角、2. 「ふだん記」の概要及びインタビュー調査について、3. 「ふだん記」のケーススタディ、まとめの構成で論じる。

## 1. 先行研究及び本研究の視角

本項では書く実践に関わる先行研究を概観し、それらをふまつつ本研究における研究の視角に関して述べる。人々が文章を書く行為は、さまざまな年齢・階層の人々の手により、多様な学習に係る中で取り組まれてきたため、書く実践を対象にした研究はさまざまな分野において論じられてきた。

例えば、社会教育・生涯学習研究においては書くことや記録する行為に着目し、成人の学びの一環の中で有力な学習方法として取り組まれてきた研究は少なくない。日本社会教育学会(2004)による『成人の学習』においては、成人の学習に係るさまざまな場面において活用されてきたことが示されている<sup>1</sup>。そこでは例えば専門職員の力量形成のための方法の観点から書くことや記録することに関する研究が取りあげられており、社会教育職員の力量形成や向上のための学習記録に着目した研究や<sup>2</sup>、成人学習の支援者の力量形成のための振り返りに関する研究<sup>3</sup>、実践記録に基づいた事例研究の意義に関する研究<sup>4</sup>などが行われている。これらは記録を力量形成の観

点から評価したものである。社会教育学会における「学び合うコミュニティを支えるコーディネーターの力量形成とその組織<sup>5</sup>」の研究では、中田（2015）が福島県における「復興支援ラウンドテーブル」の実践の中で、ラウンドテーブル報告者にとり報告に際して記録を作る行為を「実践の中の詳察を踏まえて次のレベルでの詳察の機会になる<sup>6</sup>」とし、その意義を示している。

宮崎（2007）は、生活記録を手がかりにしながら成人学習論における記録分析と課題の方法に関して、記録とそれに基づく学習を媒介にすることで詳察と高度が切断されることのない循環的実践過程が見出せるとしている<sup>7</sup>。

詳察のための記録に着目した研究に関しては、村田（2011）は記録を、詳察を支える重要な学習の方法として位置づけ、実践を行っていた国立市の公民館女性問題学習・公民館保育室活動において、社会教育・公民館学習のあり方についてひとつの体系を持った思想を紡ぎ出す上で、記録が重要な役割を果たしたと述べている<sup>8</sup>。矢口（2013）はイギリスでの生涯学習セクターの指導者養成における教育理念と方法を考察しているが、そこでは自らの実践を対象にした論文作成経験が「リフレクション」の機会になっていることを見出している<sup>9</sup>。これらの研究をみると、書く行為は記録する行為のみならず、作成された記録そのものも何らかの学びに係る意義を見出されていることが伺える。

さらに、社会教育・生涯学習の場において自らの人生を記録することにフォーカスし、学びの観点から論じている研究も見受けられる。横山（1987）の自分史に関する著書では、自分史を学習の方法としてとらえその観点から自分史の書き方や自分史学習グループの実践内容が論じられている<sup>10</sup>。他にも中澤（1996）は生涯学習の分野における学びの方法として、書くことによる学びの方法を紹介している。そこでは自分史を書くことを学習メディアによる学びの方法ととらえ、その手法を紹介している<sup>11</sup>。既存の社会教育・生涯学習研究において書くことは成人の学びの方法としての意義を見出され、その実践過程で作成された記録とともに評価されてきたことが伺える。

学校教育分野における書く実践を対象とした研究では、書く実践を子どもたちの教育方法の一つととらえ、その意義に着目した研究などをみることができる。青柳（2007）は「経験の見つめなおし」に詩を書くことは、昔感じていたことを経験として見つめ直しその時の感情を新たな言葉で捉える行為だとし、小学校で詩による学習の実践研究を行っている<sup>12</sup>。この研究は小学校において詩を執筆することを学びの意義を持つものとして意味付け詳察したものである。子どもの生活指導における書くことの意義を取り上げた杉山（2009）の研究では、子どもが自らの生活を主観的に書くこととともに他者との対話などに関わらせることによって学ぶこと重要だと指摘する<sup>13</sup>。さらに、小沢（2009）による大学生を対象に、文章作成をさせることで自己理解を促す視点で行われた研究もある<sup>14</sup>。これらの学校における書く実践に主眼を当てた研究は執筆者や書く内容こそ異なるが、いずれの研究においても書くことが書き手に何らかの学びをもたらす意義に着目している。一方でいずれの研究も子どもを対象にした研究であり、教育的な意義に限定されている。さらに子どもを対象とした研究である性質上、短期的なスパンでの変化を促すことに主眼を置くものであり、人間の人生のあゆみから書くことの意義をみる本研究とは異なる。

さて、戦後社会教育の中で行われてきた書く実践に関する先行研究では、1950年代に隆盛した

生活記録に関するものを中心に蓄積がある。紙幅の関係もあることから、ここでは書く実践の意義に関して言及しているものを中心に上げたい。

鳥羽（2010）は生活記録が盛んであった1950年代に関して「記録」の時代ととらえ、サークル活動・生活記録の他にもルポルタージュ絵画、テレビ・ドキュメンタリーなどととも論じている<sup>15</sup>。そのうちサークル活動や生活記録に関しては、次のように述べる。

「この時代の生活記録運動と国民的歴史学運動は、それぞれの方法での『記録』により自己を書き替えていく、主体を変革していく契機となった。その意味を軽んずることはできないであろう<sup>16</sup>」。ここには記録する行為（生活記録では書く実践）は単に記録を残すことではなく、書き手自身の変革に関する意義が見出されていることが伺える。

さらに、北河（2014）による生活記録運動に関する研究では、山形・岩手・秋田の3県の運動に焦点を当て、岩手の社会・文化運動と『岩手の保健』、山形の教育文化運動、秋田の生活記録運動、山形県の農村女性生活と記録運動などを実証的に取り上げている<sup>17</sup>。そこでは農村の青年・女性にとって記録運動が持った意味に注目して検討しているが、例えば秋田県の文集『母の実』の発行に関する研究においては「女性たちの長い間抑えられてきた、忍従と諦観、『古い殻』からの脱却を願う感情の奔出をもたらした<sup>18</sup>」ことなど、女性の感情の奔出としての書くことの意義を明らかにしている。

生活記録の研究においては、例えば猿山（2014）は鶴見和子の1952年に組織された生活記録サークル「生活をつづる会」の組織構造や学習プロセスの研究を行っており、他者との新たなつながりを生み出しより多くの人々に向けた生活運動の「記録」の可能性を模索した姿を描き出されている<sup>19</sup>。さらに、1950年代の生活記録運動に関して多様な研究が行われてきたことをしめしつつも、時代的状況や社会状況を考慮しつつ多様な事実を顕彰することの必要性を論じた辻智子らによる研究もある<sup>20</sup>。ここまで述べてきたように、成人の学習において、書く実践は多様な方面から研究がされており、例えば書かれた内容の詳察などを通じた学習や自分史学習などが着目されてきた。

本項で取り上げてきた研究を概観すると、学校教育における書く実践に係る研究では、多くが児童生徒の学習方法として何らかの執筆を行うことの意義に着目している一方で、あくまでも学びの一手段での位置づけの評価が中心となっているものが多く、書く実践そのものの持つ意義までは対象とされていないように見える。また、これまで戦後社会教育の書く実践に関する研究、特に1950年代に隆盛をみせた生活記録運動をみると、その豊富な実践の積み重ねから、書くことの意義も相当に解明されてきた。しかしながら、生活記録運動隆盛の中心は1950年代であり、必ずしも長期的な運動とはならなかった。そうしたことから、書き手の人生と重ねあわせながら書くことの意義をみる研究の側面に関してはこれまであまりみることができなかったように思われる。そこで本研究では特に人生の長いあゆみのなかで、書くという行為が人にならざるのかという点を踏まえながら論を進めたい。

## 2. 「ふだん記」及びインタビュー調査の概要

### (1) 「ふだん記」の概要及び創始者・橋本義夫

本節では「ふだん記」の概要、「ふだん記」を創始した橋本義夫の略歴に関して述べる。「ふだ

ん記」は1960年代後半より始まった庶民の文章運動であるが、現在もなお「ふだん記」の活動は継続されており、各地グループといわれる全国各地にある「ふだん記」の活動を行うグループも2016年6月現在、18グループにのぼる<sup>21</sup>。それぞれのグループは「独立するが孤立しない」を提唱した橋本義夫の言葉の通り、上下の関係はなくそれぞれのグループに所属している文友が他グループの機関誌に投稿するなど、折々で関わりながら機関誌や本の発行、交流などを続けている。さまざまなグループで発行されている機関誌や「ふだん記」運動の文友が執筆した単行本は現在もなお発行され続けており、相当の本が蓄積されている。

「ふだん記」に書かれる文章の内容に関しては、基本的には自らの来歴、すなわち自分史が多く見られ、そこでは「ふだん記」に関わる者の生きてきた人生や想いが綴られている。自分史の語を提唱した色川大吉は1975年5月頃の機関誌〈ふだんぎ〉38号が出た頃の「ふだん記」について「この時期の個人文集や自分史本には、日本庶民文章史に残る珠玉のような佳作が数多くある。私などもそのころ読んで、その迫力に驚嘆したものである<sup>22</sup>」と評していることにあらわれているように、それぞれの「ふだん記」で綴られている執筆者の自分史はその時代を生きた市井の人々の足跡を記す意味を持つものである。なお、「ふだん記」の中心は書き手の自分史ではあるが、それだけにとどまらない。書き手の来歴の他にもさまざまな形態の文章が書かれており、例えば詩やエッセイなどもみることができ、多岐にわたる文章が書かれている。

「ふだん記」運動の創始者である橋本義夫は、「ふだん記」で書かれる文章において何よりも大切なことは「一般の万人を主人として、その万人が書くことができ、読むことのできる文章が主体でなければならない<sup>23</sup>」と説く。すなわち、誰もが気兼ねをせず読み書きのできる文章であることが主眼に置かれているのである。そのことからみても「ふだん記」は橋本の述べる「だれでも書ける文章」なのであり、万人のための文章運動という性質がみえる。

また、「ふだん記」を創始した橋本義夫は、最大のライフワークである文章運動「ふだん記」に至るまでも多くの実践に取り組んでいる。戦前では青年期には地元での学習運動、多くの書籍を置き地域の文化センター・たまり場的役割を果たした書店・揺籃社の開店。戦後に入ってから自らの地元である八王子、三多摩の地域文化への取り組み。地域で「埋もれた」状態にあった人々を顕彰する建碑運動、八王子・三多摩の地域文化に関する数多くの執筆や投稿など非常に多岐にわたる。これらの地域に根付いた橋本義夫の生涯にかけて行われた実践は、「ふだん記」を生み出した橋本の背景としての価値があるとともに、橋本の実践そのものも極めて社会教育的意義を持つものとしてとらえることができる<sup>24</sup>。

ここからみられるように「ふだん記」は橋本義夫のそれまでのあゆみを経て、無名の人が書くことの大切さへの着想から生まれた書く実践である。「ふだん記」の実践では文章の執筆に加え、「ふだん記」の機関誌や「ふだん記」本などの書かれた文章を読み合い、手紙のやりとりや交流会（「逢う日話す日」）などを通じて語り合う活動も行われるなど、人のつながりもまた重んじられる。こうした読み合い・語り合いの側面から、「ふだん記」には学び合いの要素が含まれていると推察される。

## (2) 「ふだん記」インタビュー調査の概要

続いて、「ふだん記」に関するインタビュー調査の概要に関して論じる。ここでは「ふだん記」の文友4名に対してインタビュー調査を行った。今回調査を行った対象の4名はいずれも女性で概要は表1の通りである。

調査者のサンプリングの実施にあたっては、人生との関わりから書く実践の意義をみるという目的志向のサンプリングに主眼を置いた。すなわち、本研究においては、特にライフストーリーを概観しつつ、人生の転機とも重ね合わせながらの分析を試みることに焦点化するため、「ふだん記」に自らの人生のあゆみを多く投稿し、かつ70-80歳代で多くの執筆を重ねた人物を対象とした。本研究で明らかにすることの中で主眼をおいたのは書く実践（ここでは「ふだん記」）の人生における意義であり、被調査者とある程度の「ふだん記」との関わり方の長さの観点でとらえると、本研究で対象とする4名は、「ふだん記」と関わりをもってからそれぞれ36年、34年、46年、25年の年数があり、分析しうるものと推察した。

インタビューの概要を以下に示す。方法は表1の4名を対象にグループでインタビューを行った。主に、被調査者それぞれから「ふだん記」との出会いを含めたライフストーリーを語ってもらい、「ふだん記」に参加した感想や「ふだん記」の中で感じたこと、橋本義夫の言葉の中で好きなものなどを語ってもらい、それぞれのライフストーリーの語りが終わったあとに4名全員で「ふだん記」や橋本義夫への思いを自由に述べ合う形式をとった。さらに、インタビューに先立ち経歴や「ふだん記」との出会いの時期に関して問う調査紙による簡易アンケートを実施している。

表1 インタビュー調査を行った「ふだん記」調査対象者（2015年1月14日時点）

氏名	年齢（調査時）	性別	「ふだん記」を知った年（参加年）
小林薫氏	80代半ば	女	1979年3月 （同年の「逢う日語る日」）
金幹子氏	80代半ば	女	1981年11月 （同上）
橋本和子氏	70代前半	女	1969年秋頃 （ガリ版刷頃より）
張山てる子氏	60代後半	女	1990年8月頃 （1990年11月初投稿）

（五十音順）

表2 インタビュー概要

調査名	「ふだん記」に関するインタビュー
調査日、場所	2015年1月14日、小林薫氏宅
調査対象	「ふだん記」文友4名
調査方法	グループによる半構造化インタビュー
調査内容	「ふだん記」に出会うまでの人生の歩み、「ふだん記」参加へのきっかけについて、「ふだん記」に参加しての感想、感じたことなど

次節においては、ライフストーリー・インタビューでの語りや執筆した「ふだん記」を参照しつつ4名それぞれの人生における「ふだん記」での書く実践の意義を論じたい。

### 3. 書く実践の意義に関する「ふだん記」のケーススタディ

#### (1) ケース1・小林薫氏

はじめに取り上げる「ふだん記」文友の小林薫氏は、1930年代生まれで調査時80代半ばの女性である。出生地は東京府下西多摩郡（現在の東京都西多摩地域）、主な生育地は北海道亀田郡であり、幼少期から青春時代までを過ごしている。「ふだん記」に多くの投稿を行っている。主著は2011年に出された『花咲く道へ』<sup>25</sup>。本書は小林薫氏による自分史の本であり、312ページに及ぶ。小林氏は本書を橋本義夫との「先生の約束」といい、2015年の「ふだん記」の機関誌にも次のように記している。「橋本義夫先生と約束した『いつか自分史を出します』。これはやっと数年前、果たすことができたけれど、その時の嬉しさと、安堵感は私を今も幸せにしてくれている<sup>26</sup>」。同書は自分史篇、エッセイ篇の二部構成であり、自分史篇の中では小林氏人生の振り返り、「ふだん記」に関する思いなどが綴られている。苦労を重ねた人生の歩みが克明に描かれた書である。自分史篇では自身の家族のルーツ及び自らの出生からの来歴と「ふだん記」に巡りあうまでの人生が、エッセイ篇では、自身の日常での記録や思い、さらには執筆時での人生の振り返りなど、さまざまなエッセイが収録されている。

小林氏は、幼少期から青年期までを北海道の各地で過ごす。学校での学びに関しては、国民学校高等科入学頃は戦時中の中での学びであったこと、さらに小林氏自身が病気がちでありそのことから戦中から戦後直後にかけての学齢期においても入退院を繰り返してきたことなどから、学校で学ぶ機会に恵まれることはそれほどなかったという。北海道の道南で就職後も北海道を転じたのち、小林氏は家族のこと、2人の子育てのことなどさまざまな事由から上京することになる。

「死ぬ気で出てきたことは確かなんです。いや、死ぬというかもう行き詰まったら死ぬしか無いというか、子ども二人いてね、それで家庭的にうまく行かなくて人間関係もギスギスして、一生懸命まじめに生きてきたのになんでこういう風におかしくなっていくんだろっていう、自分ばかり責めて、辛かったんです。で他にいくところもないから生まれたところに近いところに行きたいなっていう気持ちで出てきたんです<sup>27</sup>」。

上京時の気持ちを語るこうした言葉からは、小林氏のそれまでの心情が読み取れる。「ふだん記」に出逢うよりも前の人生のあゆみの中で、多く労苦を経験してきた辛さである。

上京後も苦労ののち職を得ることができ、都心での暮らしを経たのち現居でもある三多摩に移り住んだ。しかしながら、1978年秋には心臓疾患で手術を行い失職することとなる。

「病気になって、働けなくなって行き詰まって、娘はだいぶ大きくなっていましたので、心臓手術しなきゃならないって時に、本当になんかこれからどうして生きていけばいいだろうって思っていたんです<sup>28</sup>」。

小林氏が「ふだん記」を知ったのは手術と失職により、不安を覚えるようになっていたことがきっかけであると語る。この時期の気持ちについて、小林氏は自身の著書『花咲く道へ』におい

でも次のように綴っている。「それまでの一家の柱として、慎ましく、二人の子供と身を寄せ合って働き詰めていた日々から、先の見えない病後の暮らし。決まった収入の道が閉ざされ、つい希望も暗くなりがちになる<sup>29</sup>」。必死に生きてきた小林氏が直面した困難、「ふだん記」に出会ったのはまさにこうした時期にあたる。

こうした状況をみた小林氏の長女が、橋本義夫の著書『だれもが書ける文章―「自分史」のすすめ』<sup>30</sup>を購入し、小林氏に渡したことから「ふだん記」を知ることに至ったのである。橋本の書を長女が買ってきた理由は、「私がいつも聖書を読んだり、一人で考えたりしていることを子どもたちなりにみてね、書いたり読んだりするの好き<sup>31</sup>」だった母の姿にあったという。それまでのあゆみとそこで苦闘することが結果的に「ふだん記」へとつながったと思われる。小林氏は『だれもが書ける文章』を、「読んでたら私自身が今行き詰まっている道が拓けてくるんじゃないかなって感じて<sup>32</sup>」読み、橋本へ手紙を出し、以降は「ふだん記」の文友の集まりに参加するようになる。

「ふだん記」と関わり始めた頃に関して、小林氏は自身の著書において次のように綴っている。『「ふだん記」』に投稿して、四宮さつきさんを始め、大野弘子さんや諸先輩からのお便りをたくさん頂いた。いわゆる『新人優先』の決まりごとを皆守っていた。そうして、気の合う方々との交流を通し、書くこと、読むことで日頃の思いを分かち合い、新しい出会いに広がっていく。それは、私個人が社会を広く知るきっかけにも繋がっていった」。ここにある「新人優先」とは、「ふだん記」の根幹となる理念の一つであり、新しく文友となった仲間を重んじる考え方である。小林氏はこのような雰囲気の中、自らのことを綴り、読んでもらうこと、他者のことを読み、知ること、こういった過程を経て他者とつながり社会を知る契機になったとするのである。

こうした「ふだん記」へ参加し、書くこと・読むこと・話すことに関して小林氏はこう述べる。

「自分をそこで解放できるんですよ。……耐えていたものが全部解放されて、さっぱりしてきた（笑）、気持ちがよくされてね、そういう生き方もあるんだって。私どうしてどうしてって思ったけど私の感じてたことは間違ってたんだと、そういう風に思うようになったら、すごく気が楽になって、幸せな感じつかまえましたね。……少しずつ人間を変えていく、前向きに変えていく力は先生にはすごくあったんですよ<sup>33</sup>」。

ここからみえることの一つは「ふだん記」での実践は、自らの解放につながるしていることにある。書くことなど「ふだん記」に参加したことで自らが囚われてきたことから脱却し、自らの気持ちが開放されたと語っている。いま一つは、「ふだん記」の創始者である橋本義夫の存在の大きさへの言及である。書くことで自己を肯定することができた背景に、橋本義夫への強い信頼が読み取れる。

小林氏は好きな橋本の言葉に「その人よかれ、その土地よかれ」を挙げる。橋本がさまざまな人や土地を重んじている言葉であり、まさにさまざまな人を尊重している考え方が込められていることを伺えるが、こうした言葉に出会ったことも小林氏が自らを肯定する考えにつながった要因の一つなのではないかと思われる。さて、「ふだん記」から得られたことを小林氏は以下のように振り返る。

「人間不信が解かれたこと。何の得にもならぬことに信念を燃して他の為に全霊を傾けて働く姿、信に足る真の人に出会った感動で私自身勇気をもらい救われた<sup>34</sup>」。

ここでは人への信頼をもつようになったことに加えて、橋本義夫そのものへの深い共感が示されている。橋本は「ふだん記」の実践を興すに至るまで、失敗を重ねながら地域文化や教育の実践に努めてきた人物である。このような他人のために尽くし自らを肯定する橋本の生き方にたいする共鳴が書くことの動機付けになっていたこともみえる。「ふだん記」と出会いで小林氏は人への信頼をもたらし、自らの半生で感じたことを肯定することができたことが読み取れる。小林氏にとって「ふだん記」で書くことの意義は、このような他者・自己への信頼の中で自らを解放することであると思われる。

「ふだん記」雲の碑グループの機関誌である〈ふだんぎ 雲の碑〉への小林氏の投稿作品をみると、こうした他者への信頼、自らへの解放を読み取ることができる。例えば、『「私の宝物」橋本先生のお便り』（9号、2001年12月）、「行って良かった、旭川交流会」（13号、2003年12月）や『「ふだん記」にまつわること』（20号、2007年6月）、『「ふだん記雲の碑」25号に寄せて』（26号、2010年6月）などがある。「ふだん記」創始者の橋本義夫や「ふだん記」、文友に関する作品では、「ふだん記」と小林氏の出会いの重要性をみることができ、さらに「心に学んだ、先生の言葉『素直になさい』（21号、2007年12月）、「私の三十歳の転換期とその後」（30号、2012年6月）、「父のこと、そして母」（31号、2012年12月）などの作品からは、自らの人生における重要なできごと、転機や家族のこと小林氏的心情が率直に綴られている文章を綴っている。

## (2) ケース2・<sup>こん</sup>金幹子氏

続いて取り上げる「ふだん記」文友は、<sup>こん</sup>金幹子氏である。金幹子氏は1920年代末に生まれ、実家は薬屋を営む家庭に育った人物である。金氏の人生と「ふだん記」を重ねる上で重要な存在の一人が、薬剤師であった父のことである。次のように振り返る。

「生まれて親元に居るときは恵まれて生活出来ました。経済的ということだけじゃなくて、父親は非常に考え方が綺麗で、店だったから番頭さんとか……そういう人達に対する態度が綺麗だったです。あの、卑しめるとか、荒立たしい声をだすとか、そういうことは一切なくて、……父を慕ってこうあるべきだという形で成長しました<sup>35</sup>」。

恵まれた家庭・家族の中、そこで人の清らかさなどをみて育ってきた1950年代に秋田市内で結婚、その後1970年台に夫の仕事の都合で東京へ移住をする。一方で結婚生活は、いわゆる「よめ・しゅうとめ」の関係に悩み非常に辛かったと振り返っている。

「夫は……あまり判断は私と違わなかったんですけど、あのそこでよめ・しゅうとめという……人並な嫁の苦痛を味わったということもあります。……人と人はこうあらねばならぬというそういうものは全然その中では通用しなくて、とにかくその姑のいうことを聞くという。そういうんですね。で、40年近く生活したところから、意見の言えない生活がいつまで続くのかと、それであのころは私もちょっとノイローゼ気味になってて、……閉じ込められた生活だったんです<sup>36</sup>」。

「ふだん記」との出会いはずらさが積み重なった時期でのことであった。「ふだん記」を知るこ

とになったのは1982（昭和57）年11月3日。家族が不在の時に、文化の日の朝日新聞を偶然、目にしたことが契機であった。当該記事はすでに手元にないとのことであったが、八王子での技能功労者の表彰が掲載され、和裁の神田貞子氏が紹介されており、自分史を書くというふだんぎの会に神田氏が入っており、「和裁60年」という自分史をまとめていた短い記事であったという<sup>37</sup>。その記事を読みすぐに会場へ向かい、神田氏の自宅へ伺ったとのことである。金氏は次のように述べる。

「子どもの時から書いてればいいという人で書きたい人だったんですよ。……認めてもらいたくて大きな紙に詩を書いて張り出しておくんですよ。……でもそれはもう一蹴されてしまって。……書けなかったらね、私死んでしまうって言ったの。死ぬっていうのは実際に死ぬじゃなくて、心が死んでしまうということでもう私じゃない人がここでただいるだけの。……それがいつも心の中にモヤモヤしていて、新聞で記事を見つけるとすぐに家を飛び出していたんです。とにかくここでは誰の承諾も得ないで、もうすぐにぱっとって飛び出したんですよ<sup>38</sup>」。

元々書くことが好きであったという金氏は書くことができない環境に置かれてしまったことを「心が死んでしまう」と強い言葉で表現をしている。ここには書くことを望む強い意志を感じられる。こうした「ふだん記」との出会いにおける気持ちに関しては、金氏が執筆をした「ふだん記」の叙述でもあらわれている。「ふだん記」みちのくグループの機関誌〈ふだんぎみちのく〉66号（2013年12月）には次のようにある。

「二十代で親元を離れ他人の中で暮らし始めた時、私にはとても大きな悲哀と喘ぎの生活が待っておりました。その重い時代は長く、ふだんぎに入った五十三歳まで続いたこととなります。“世の中とはこんなものか”と失意で悶々としていた頃、朝日新聞で『ふだんぎ』のことを知りました。なんとという運の不思議さでしょう。あの日から私の内部がガラリと変わりました。新聞の記事を読んだ瞬間、強烈な引力を感じて早くも私は八王子に向かっていました<sup>39</sup>」。

金氏が「ふだん記」の世界に飛び込む背景には「ふだん記」が文章を執筆する運動であることを、「ふだん記」で35年以上に亘り書き続けることには「ふだん記」の特質があったことを、それぞれ伺い知ることができる。

金氏の「ふだん記」をみる視点は、綴られた文章から伺うことができる。例えば、「漫然と仲間が欲しかっただけではなくて、私がなにより好きな作文の世界だったからなのです<sup>40</sup>」と、「ふだん記」を「なにより好きな作文の世界」と、「ふだん記」との出会いは、自身が幼少期から好きであった文章を綴る世界との出会いであったことが綴られている。しかしながら、書き続けることに関しては、他ならぬ「ふだん記」であったことが重要であったことをまた、記録している。

「文章を書くサークルなら何処にでもあります。橋本義夫氏の様に苦渋の道を辿りながら、身にも心にも壮絶な傷を負ってまで大衆の幸福を願って生きる人物が、今の世に存在しているなど知るはずもなく、目の前で拳を振って会場の皆に熱く語る姿に私まで熱くなっていました。橋本義夫を知るほどに、次第に私の心の置き場所が定まって行ったと言っても過言ではありません。『下手に書け』はまるで魔法の様で自分でも驚くほどの勢いで書き続け、書くほどに辛かった過去は軽く語れるまでになりました<sup>41</sup>」。ここからは金氏は文章を書くことのみならず、「ふだん記」

の創始者、橋本義夫の存在によって、「ふだん記」への関わりを深めたことを読み取ることができる。ここで書かれている「下手に書け」（「下手に書きなさい」）は「ふだん記」の鍵概念の一つであり、書くことを恐れずに記録を残すことの大切さを説いた橋本の言葉である。

さらに、「ふだん記」で書き続ける中で得た気づきを書き残している。「これまで深くも考えずにふだんぎの世界で過ごしてきましたが、この世界には何か人の心を解いてくれる良いものがあるようです。まずは文章を書こうとする時、自分がとても素直になっているのです<sup>42</sup>」。

金氏の書いた「ふだん記」をみると「ふだん記」との出会いや日常のことを綴った文章の他にも、「日本善行賞に輝いた人」（〈ふだん記 雲の碑〉10号、ふだん記雲の碑グループ、2002年6月）のような家族（母方の従兄）を綴った文章、「小林薫さんの『花咲く道へ』を読んで」（〈ふだん記 雲の碑〉10号、2012年6月）や「星野さんの自分史『木工職人で生きる』を読んで」（〈所沢ふだんぎ〉42号、ふだん記所沢グループ、2015年10月）のような文友の本へのメッセージなどもみることができる。

金氏は「ふだん記」に関して次のようにいう。

「『ふだん記』の橋本先生を中心に『ふだん記』はまるで私の故郷を感じるんです」。

「私の中のその理想は父親であった。その父親と同じ流れを組むような先生であった」。

「橋本精神が私の第一義で『ふだん記』にいるんです……書くなら他でも書けるんですけど、橋本精神ですね<sup>43</sup>」。

橋本義夫の中に自らの生まれ育ってきた世界のやさしさや理想像を見出し、橋本精神を最も重視しつつ、橋本が存在する「ふだん記」だからこそ書けていることを強調している。金氏が「ふだん記」で書くことで得られたことに関しては、以下のような言葉を示している。

「書いて読んで頂いて、周りに理解されて、とても大きな鎮静剤となり、競争のない友人関係を育むことが出来たと思っている」。

「どの人との間にも優劣をおかない、『その人良かれ』が私を大きく変えたと思っている。優しい心で他人と接するようになった<sup>44</sup>」。

金氏はおだやかさを獲得したと、例えば競争のない、優劣をおかない、優しい心、などの言葉をもって語っている。金氏が「ふだん記」で書くことの意義は他者をよりおだやかに受容するようであった自らの気持ちの変容がもたらされたことであると思われる。

### (3) ケース3・橋本和子氏

続いてとりあげるのが、1940年代半ば生まれの橋本和子氏である。橋本和子氏は、1969年秋頃のガリ版刷の時期である「ふだん記」の初期から活動に参加をしていた文友にあたる。なお、「ふだん記」の機関誌である〈ふだんぎ〉の第1号は1968年1月の発行のため、1969年からの参加は、草創期から参加をした文友の一人と推察できる。この時期の「ふだん記」の状況をみると、1969年10月に「ふだん記」11号が発行されるなど、ガリ版刷りで機関誌が発行されていた時期であり（ガリ版の最後は1970年12月発行の「ふだんぎ」17号まで）、「ふだん記」が知られる契機の一つである1970年2月14日の朝日新聞夕刊のコラムよりも前の時期にあたる<sup>45</sup>。なお、当時橋本和子氏は20代半ばであるが、橋本義夫は「ふだん記」を担う若い主婦に関して次のような言葉を記してい

る。「家庭主婦たちが『ふだん記』運動の主力をなしている。これは明日の文明社会の報告を示唆している。とくに三十代の家庭婦人の活発さは人類文明に明るさを投げるようだ<sup>46</sup>」。橋本和子氏はまさに橋本義夫のいう主力にあたる若い時期からの文友である。

橋本和子氏は東京区部の生まれ、父は公務員、母は小学校教員の家庭に育つ。生まれて2ヶ月で疎開のため父の郷里の鹿児島県に移り、そこで幼少期を過ごした。最初の転機は高校卒業頃である。姉が既に在京の大学に在学し、それをたよって上京をしたものの大学受験に失敗、前年に父を亡くしていたために浪人ができなかつたため、窓口事務の仕事に就く。当時を橋本和子氏はこう振り返る。

「落ちてしまって行き場がなくて本当にしんどいものですね……18歳でね。……行き場のない18歳の娘はどうしようもなかつたんですけど、それで就職でもしようかと思って探したら、驚いたんですが世の中には差別があるっていうことにね。……17歳で父が死にましたから。……それから東京に家がないということと、その自宅から通勤できないということで試験が受けられないんです。それで……大学が職員を募集してたんで、そこに行ったら受かったんですけどね。それで窓口事務をやっていました<sup>47</sup>」。

18歳の年で強烈な矛盾を感じていたと橋本和子氏は振り返る。橋本和子氏の人生における転機の一つとして刻まれていたことが伺える。その後、大学で事務の仕事をするうち学生と係る仕事をしていながら、図書館司書を志望することになる。この時期の図書館司書を志望する思いには、橋本和子氏の書く実践との関わりの萌芽をみることができる。

「私が好きなことは本を読むことと、なんとなく文章を書くことが好きだったものですから。そして司書になって、自立した生活をしようと思ったんですね<sup>48</sup>」。

本を読むこと、書くことが好きだったという橋本和子氏はその後、特待生として大学の短期大学夜間部へ入学、大学近くの職場に転職し勤務の傍ら大学に通い、図書館司書の資格や中学校の国語科教諭の教員免許を取得して卒業する。しかしながら大学卒業と同時に結婚、さらに数年後に第1子、その翌年には第2子を出産する。この時期が「ふだん記」と関わる転機の一つである。

「その頃結婚したら仕事はしないというのが普通でしたから。なんとなく割り切れないまま、ずっと子育てをしてきていたんですけども。……一人をおぶって一人を抱いて、泣き喚くのはどうしようもなく、そして世間からみれば恵まれた暮らしなわけですよ。家において子育てをしながらという状況だったんですが、私はその時社会的に孤独を感じたんです<sup>49</sup>」。

結婚・子育てだけではない人生の生き方への意識に触れ、当時の自らの状況を「社会的孤独」と評しながら振り返っている。「ふだん記」への出会いはこの時期である。1969年秋頃の朝日新聞三多摩版の記事であったというのが、現在はその記事は手元に残っていないという。

「朝日新聞の三多摩版に「ふだん記」の事が出てたんですね。自由に普通の奥さんたちが文章を書いて、それを本にしているという。それがすごく衝撃的だったんですね。……そしてすぐに橋本先生に手紙を書いて『ふだん記』に入れていただいたということが最初の契機です<sup>50</sup>」。

橋本和子氏は記事のことをこう振り返る。その直後に橋本義夫宛に手紙を書き、「ふだん記」に参加したという。なお、記事を書いたのは坂本龍彦記者。坂本記者は他にも1984年10月11日朝

日新聞夕刊に「ふだん記」の記事を掲載し『『だれもが本を書く時代』がきている<sup>51</sup>』と評している。生前の橋本義夫と縁深い考古学者である梶国男や生前の橋本義夫とも関わりがあり、雲の碑グループの機関誌〈ふだん記 雲の碑〉にも追悼記事が掲載されている<sup>52</sup>。

人生における度々の転機や「ふだん記」との出会いは、橋本和子氏自身も〈ふだん記 雲の碑〉への掲載作品で自分史を語るエッセイ、「連翹の花」に詳しい。同作では春先に咲く連翹の花から想起される感情を端緒に、17歳時の父の逝去や社会人として働きながら通った大学での学びののちの結婚を綴ったあと、こう綴る。「次々に子どもも生まれ、幸せいっぱいだった頃、幸せの裏の子育て中の閉塞感を新聞で見た『ふだんぎ』が救ってくれた。昭和四十五年頃のこと、生まれたての『ふだんぎ』も草創の気がみなぎっていた<sup>53</sup>」。さまざまな人生の転機を経ながら、巡り合った「ふだん記」を閉塞感を救った存在として述べ、文友たちによる「ふだん記」創始期の熱に言及している。また橋本和子氏は、家族と共に「ふだん記」に関わりを持っている。本人だけでなく家族（義母）も参加し、「ふだん記」に執筆を行っていた。さらに、橋本和子氏の社会学者である配偶者も「ふだん記」に関心を持ち応援していたという。そのため橋本和子氏の「ふだん記」の実践は家族の応援の中で行われていたことも特徴として見出される。

橋本和子氏は10年ほど「ふだん記」に書いたあと、1980年代初頭に配偶者の仕事の関係でアメリカへ渡る。これを契機にしばらく「ふだん記」からは離れていたが、現在は再び「ふだん記」で執筆を続けている。

「ふだん記」に参加してから変わったことに関して、橋本和子氏は次のように語る。

「書くことで考えますから、そして、なんと云いますかたくさん家族を得たみたいな。『独立するが孤立しない』という言葉と。「文通することでみんながきょうだいのような、家族がどこにもいるという感じがね、日本中にいるって感じが<sup>54</sup>」。

「ふだん記」という実践は書き、読み合い、手紙を出し合う。こうした活動が「ふだん記」のもたらした自身の変容であるとする。他にも、「ふだん記」とは別に短歌の結社活動にも参加しており、書くことや仲間づくりということに関して「私は『ふだん記』と『音』、二本柱だと思っています<sup>55</sup>」と述べている。橋本和子氏は雲の碑グループの機関誌〈ふだん記 雲の碑〉などで米国滞在中の記録を記している。橋本和子氏は自らが考える「ふだん記」の社会的意義に関して、「私達が一声でも。残る、残らないじゃなくて、記録になる。時代の記録に、証言になる<sup>56</sup>」

と「庶民」が書き記していくことが記録として重なり、それぞれの歴史の生きた証言になると語る。こうした語りにみられるように、橋本和子氏の執筆した「ふだん記」には、時代の記録を意識した作品が少なからず見受けられる。

例えば、「逆白波のひと 土門 拳」(〈ふだん記 雲の碑〉14号、2004年6月)は、写真家・土門拳が義父の入院時(1985年7月)の二人部屋の隣のベッドだった経験から、佐高信『逆白波の人土門拳の生涯』を読み、土門拳の生涯に対して「まったくの偶然から、日本の写真史に偉大な業績を残した人物の最晩年の姿を垣間見る機会があり、それから二十年近く経った今、またその業績をふり返って深く胸を打たれている<sup>57</sup>」と綴る。「篤姫をめぐる人々」(〈ふだん記 雲の碑〉23号、2008年12月)では、自身の生育の地鹿兒島と姉の関わりから紹介され読んだ本から、篤姫を巡る人々を書いている<sup>58</sup>。他にも「よくろべ列伝」(〈ふだん記 雲の碑〉23号、2010年6月)

という「酔いを食らう者」ともいうべき郷土の酒飲み者の伝記を記す作品もある。

橋本和子氏は「ふだん記」から得られたこととして「庶民が生活記録を残すことの歴史的証言<sup>59</sup>」とする。「ふだん記」の文友たちが庶民の歴史を担っているのだとする自負をもちながら、自らとの関わりなどを契機にしながらさまざまな歴史を書き記していることから庶民の書き残す歴史の証言という橋本和子氏の視点を読み取ることができる。

かつて「社会的孤立」を感じていたことを「ふだん記」との関わりから払拭し、文友との繋がりの中で、庶民の目線からの歴史を書き記し続ける「ふだん記」の意義をみることができる。

### (3) ケース4・張山てる子氏

張山てる子氏は1940年代半ばの青森県北津軽郡生まれで生育も同地であり、その後、三多摩に移り自営業を営んでいる。東京在住であるが、所属はふだん記津軽グループであるように、張山氏にとり津軽が極めて重要なものであることを伺うことができる。なお、「ふだん記」への参加は橋本義夫没後の1990年頃でありおおよそ25年のかかりとなる。全国に広がる「ふだん記」各地グループに広く投稿をしており、これらをまとめた自作本を3冊作っている。張山氏は青森県で中学、定時制高校卒業までを過ごす、高校卒業後2年ほど札幌で過ごしている。高校在学時地元の大学生協に勤めているが、その時の気持ちをこう語っている。

「定時制高校卒業して一回津軽から離れて私は札幌に就職したの。……私は弘大の生協に勤めてたのね。定時制の時。自分と同じ歳の子が皆大学生で入ってきたら悲しくて悲しくて。なんか1回は青森県から出てみようっていう<sup>60</sup>」。

高校を卒業後における、学びに対する潜在的な意欲をこうした語りから伺うことができる。なお札幌では2年間、さらに弘前に戻り3年を過ごしてから、1970年初頭に上京、就職をして簿記学校に通う。その後結婚し、三多摩に居を構え自営業となるあゆみを歩んでいる。

「ふだん記」との出会いは三多摩に出てしばらくの時を経た1990年8月である。弘前在住の友人から、東奥日報（1990年8月6日）の「ふだん記」の記事を送られたことが契機という。張山氏は自らの書くことに関する経験を述べつつ、以下のように振り返っている。

「私筆まめだったからね。暇さえあればね、……手紙をほんと書いてたのよ。……（弘前の友人が）「私は返事書けないけれど」って何気なく見てた新聞（を送ってくれて）……これが「ふだん記」を知るきっかけ<sup>61</sup>」。

この東奥日報の記事では「ふだん記」津軽グループを紹介した記事で、『『下手に書こう』や『書いたら手元に置かず、どんどん送ってしまおう』拙速主義を信条とするあたり、なんともユニーク<sup>62</sup>』と「ふだん記」を評している。同記事にはふだん記津軽グループの連絡先も記載されており、すぐに津軽グループの窓口で電話で連絡をとったという。既に当時三多摩に居住していたが、三多摩地域の「ふだん記」のグループに入らず、あえて津軽グループに加わった経緯がこう語られている。

「だけど私はね、青森県はさ、目立たない性格の人が多いの、こういう人たちがどういうことを書くんだろうっていうのがまず興味わいたのね。もう、町の名前は全部青森県の地図に、青森県の位置がわかるからね、どこの町の人の誰さんが何を書くんだろうっていうのが、

津軽ふだん記に入りたかった理由<sup>63</sup>】。

自らの郷里である津軽の人たちが何を書くのが興味の出発点とし、あえて津軽グループに加わりたかったと語っている。今は故郷の青森を離れた地で暮らす張山氏であるが、書く実践に参加することで自らの故郷の人々の事を知る機会となっていることを伺い知ることができる。

しかしながら、現在は各地の「ふだん記」へ精力的に投稿を重ねる張山氏であるが、自らの事を綴ることに関する語りを見ると、すぐに書き始められたのではなかったことが伺える。

「はじめまして」って挨拶から初めて書いたんだけど。原稿用紙の3枚の長かったこと長かったこと<sup>64</sup>】。

故郷との繋がりへの意識から参加を決意した一方、書き始めることは容易ではなかったことを伺うことができる。なお、張山氏が「ふだん記」を知ったのは1990年8月、初投稿をしたのは1990年11月で数ヶ月を要しているようだ。一方で、その後継続して書き続けられている理由は初投稿から推察できる。初投稿の感激を張山氏が〈ふだん記 雲の碑〉に投稿をしている。その叙述をみると、「平成3年（1991）年4月津軽25号に、私の初投稿文が掲載されてまもなく届いた『こんにちは』のおハガキは、北海道から九州迄、次々激励のお便りで感動の連日でした<sup>65</sup>」と振り返られている。書き始めた新人が多く、多くの文友からの手紙の励ましで支えられることが、書き続けられる原動力となっていることを推察できる。なお、張山氏が「ふだん記」に書くスタンスは次の言葉に表れている。

「素人だから、自分が書き残したいことを書くっていうのがふだん記だから、そこあたりは本当に堅苦しくなく<sup>66</sup>】。

この結果「ふだん記」の各地グループや新聞投稿などを広げながら現在もさまざまなグループに投稿を続けているという。張山氏の執筆した「ふだん記」をみると、故郷のことや自分史、日常生活のこと、「ふだん記」のこと、さらに他の文友のことなど様々な文章が綴られている。例えば、「古里紹介」（〈ふだん記 雲の碑〉4号、1999年6月）では、郷里の青森県北津軽郡小泊村に関して毎年の帰省時の道すがらの思い出を交えながら、「無人の家に灯がつくと、『誰が来てらが』と、近所の人たちが声を掛けてくれ、『ワイハ久し振りだの』と会話も弾む<sup>67</sup>」と故郷の様子を綴っている。「伝統を守る祭の主役」（〈ふだん記 雲の碑〉8号、2001年6月）では、故郷の祭りである小泊村権現祭の様子を、青年団が主役だった自身の小学生時代（昭和20年代後半）からその後の小学生の太刀振りのことなどに触れ、「毎夏帰省したので、今もあの光景は目に焼き付いて故郷に想いを寄せている<sup>68</sup>」と記録している。さらに、張山氏は「ふだん記」あいちグループの機関誌〈あいちふだんぎ〉には、「予期せぬ出来事」というエッセイのシリーズを投稿している。〈あいちふだんぎ〉初投稿時では、津軽グループ参加の経緯やそこから始まった関東在住の津軽の文友とのミニ集会など、「ふだん記」をはじめから出会った文友との日々などを記録している<sup>69</sup>。こうした故郷の人々との繋がりには、新聞・東奥日報への投稿からつながった青森の出会いを記しながら、「一枚のハガキは、人と人をつ結びつける大きな波紋となって広がり、『予期せぬ出来事』は喜びの連続です<sup>70</sup>」と綴る文章からも伺える。

張山氏の書く津軽に関わる文章から伺えることは、故郷と離れ暮らしている執筆者と故郷のつながりである。書くことで友人関係を広げていった張山氏は、橋本義夫の言葉のうち好きなもの

に「ハガキ一本を動かす、ハガキ百本を動かす」を挙げる。ハガキは小さくともハガキを出し、積み重なることで大きな影響を残すことを示した言葉であるが、本項でみる張山氏の文章は張山氏が自身の経験からハガキを書くことの重みを感じてきたことを示していると思われる。張山氏は、こうも語っている。

「気楽にね。学歴もなくとも書こうって言って。書けば読めるって。そこが私が『ふだん記』に入った大きな収穫でした。人のつながり<sup>7)</sup>」。

張山氏は、「ふだん記」で書き始めてから全国の文友から励ましを受け、文友との繋がりを得た実践のあゆみを辿ってきた。中でも東京在住でありつつもあえて、津軽グループに所属し、さまざまな形で故郷のことを書くことなど、人生の歩みの中で故郷を離れて暮らしながらも故郷との繋がりを随所に見られる点は特徴的である。書く事を通じて故郷との繋がりを持っていたことを伺うことができる。

## まとめ

本研究では、1960年代後半から始まり現在も活動がつづく書く実践「ふだん記」を対象に、「ふだん記」という書く実践が、人生の中で書き手にもたらした意義に関して明らかにすることを目的とした。中でも4人の書き手に着目しつつ、その人生の語りや執筆した文章を対象にした。1. では関連する先行研究を概観しつつ、本研究の対象である「ふだん記」を人生との関わりから分析するという本研究の視角に関して論じた。2. では「ふだん記」の概要と、本調査の概要を論じた。これらを踏まえ3. では4人の文友を対象にしたインタビュー調査と各自が書いた「ふだん記」によるケーススタディを行った。

本研究においては、病気や生活環境の変化などそれぞれ何らかの人生の転機に直面しながら、「ふだん記」という書く実践に出会い、書くことでさまざまな変化がもたらされていることをみることができた。例えば、自己肯定感の獲得や前向きな心の変容、社会的孤立からの脱却、故郷とのつながりなどである。今回調査したケースからは、それぞれの書き手が人生のあゆみの中で何らかの形で書く事や学ぶことへの渴望を持っており、そうした経験が書く実践である「ふだん記」への参加につながっていったことも伺い知ることができた。さらに、書く実践への参加の過程では書くことだけではなく、他者の励ましや他者の文章を読み感想を交わし合うことなど、書き手同士で支え合う創始者の橋本義夫の「ふだん記」の理念に対する共感が語られていたこともみいだせた。これらを鑑みると、書き手にとって「ふだん記」で書くことは文章を執筆することとどまらず、より充実した生を送るための支えとなっている意義があることを伺うことができた。

また、書き手それぞれが選んだ主題からは、書き手それぞれが持つ書くことへの思いを読み取ることができる。例えば、家族史も含めた自分史を綴ること、他者への思いを書くこと、郷土史を綴ること、故郷のことなどさまざまな文章が発表されているが、いずれの書き手も出会った書く実践の場において得た、書くことへの渴望もみいだすことができるものである。今回取り上げたケースから浮かび上がった、各人が書く実践と出会い書くことであらわれた変容は、今後の書く実践の意義の考察に示唆を与えうるものと思われる。

しかしながら、本研究には多くの課題が残されている。特に、人生のそれぞれの時期で異なる

書く内容の変化や文章の質の向上など、書くことで学び変わっていく書き手の変化に関する分析は必要であると思われる。さらに、今回は4ケースの調査にとどまっているため、より多くの事例研究が必要であると思われる。特に全国に広がる「ふだん記」の文友を対象に、書き手相互の書き合い・学び合いなど、多角的な検討を行うことも本研究の課題である。

## 注

- 1 日本社会教育学会編『成人の学習』、東洋館出版社、2004年。
- 2 木全力夫、齋藤真哉、の野信一「社会教育職員の力量形成と学習記録」、日本社会教育学会編『成人の学習』、東洋館出版社、2004年、pp.147-159。
- 3 倉持伸江「ふり返りに注目した学習支援者の力量形成」、日本社会教育学会編『成人の学習』、東洋館出版社、2004年、pp.160-172。
- 4 水野篤夫「実践をふりかえる方法としての事例研究と職員の力量形成」、日本社会教育学会編『成人の学習』、東洋館出版社、2004年、pp.173-185。
- 5 倉持伸江、中田スウラ、柳沢昌一（司会 井口啓太郎、村田晶子）プロジェクト研究「学び合うコミュニティを支えるコーディネーターの力量形成とその組織」、日本社会教育学会六月集会、2015年6月6日（於立教大学）。
- 6 中田スウラ「社会教育実践研究・職員研究の展開とコーディネーターの力量形成」、プロジェクト研究「学び合うコミュニティを支えるコーディネーターの力量形成とその組織」報告資料、日本社会教育学会六月集会、2015年6月6日（於立教大学）、p.4。
- 7 宮崎隆志「成人学習論における記録分析の課題と方法——生活記録を手がかりに」、〈日本社会教育学会紀要〉43、2007年、pp.61-70。
- 8 村田晶子「私たちの自己教育思想と記録—国立市公民館女性問題学習・公民館保育室活動を通して」、〈早稲田大学大学院文学研究科紀要〉第1分冊（57）、早稲田大学大学院文学研究科、2011年、pp.19-31。
- 9 矢口悦子「イギリス生涯学習セクターの指導者養成における大学の役割：教育方法としての『リフレクション』をめぐる」、〈東洋大学文学部紀要 教育学科編〉（39）、東洋大学、2013年、pp.61-70。
- 10 横山宏編『成人の学習としての自分史』、国土社、1987年。
- 11 中澤智恵「私を書く 物語を書く」、赤尾勝己、山本慶裕『学びのスタイル生涯学習入門』、玉川大学出版部、1996年、pp.28-42。なお、本研究のテーマである「ふだん記」に関して言及しており、まず書かせるようにする「ふだん記」創始者の橋本義夫の理念を明快であると評価している。
- 12 青柳宏「「経験の見つめ直し」としての詩：詩を書く実践についての省察（その二）」、〈宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要〉（30）、宇都宮大学、2007年、pp.127-137。
- 13 杉山直子「教育方法としての『書くこと』についての考察：生活指導における『書くこと』」、〈梅光学院大学論集〉（42）、梅光学院大学、2009年、pp.18-29。
- 14 小沢一仁「大学の授業において自己理解を目指す文章を書くこと」、〈東京工芸大学工学部紀要〉（32）2、東京工芸大学、2009年、pp.9-19。他にも書く実践を教育方法の側面からみた歴史研究に関しては、森（2006）によるデューイ・スクールの研究（森久佳「デューイ・スクール（Dewey School）における『読み方（Reading）』・『書き方（Writing）』のカリキュラムに関する一考察：1898～99年における子どもの成長に応じたカリキュラム構成の形態に着目して」〈教育方法学研究〉31、日本教育方法学会、2006年、pp.85-96。）がある。
- 15 鳥羽耕史『1950年代—「記録」の時代』、河出書房新社、2010年。

- 16 『1950年代—「記録」の時代』同前、p.46。
- 17 北河賢三『戦後史のなかの生活記録運動 東北農村の青年・女性たち』岩波書店、2014年。
- 18 『戦後史のなかの生活記録運動 東北農村の青年・女性たち』同前、p.259。
- 19 猿山隆子「鶴見和子の生活記録運動におけるコミュニケーションと「記録」：「生活をつづる会」の学習組織の形成をめぐる」、〈社会教育学研究〉50(2)、2014年、pp.11-20。
- 20 片岡了・辻智子「共同学習・生活記録」、日本社会教育学会50周年記念講座刊行委員会編『成人の学習と生涯学習の組織化』、東洋館出版社、2004年、pp.108-119。
- 21 ふだん記雲の碑グループ（「ふだん記」発祥の地である八王子のグループ）による機関誌〈ふだん記—雲の碑〉38号、2016年6月では紹介されているグループ数は18、北海道に6つのグループ（「さいはて」、「旭川」、「札幌」、「江別」、「留萌」、「帯広」）があり、南では九州・福岡県（「北九州」）までグループが活動をしている。
- 22 色川大吉「自分史論」、色川大吉『常民文化論』色川大吉著作集第三巻、筑摩書房、1996年、p.370。
- 23 橋本義夫『新人類文化のすすめ—宛名のない手紙—』、ふだん記旭川グループ全国グループ刊、1983年、p.31。（本部分は引用にあたり傍点を削除した。）
- 24 川原健太郎「橋本義夫の社会教育実践の一側面に関する研究」、早稲田教育評論29-1号、早稲田大学教育総合研究所、2015年3月、pp.1-20。
- 25 小林薫『花咲く道へ』ふだん記創書34、ふだん記雲の碑グループ、2011年。
- 26 小林薫「約束」、〈ふだん記 雲の碑〉36号、ふだん記雲の碑グループ、2015年6月、p.14。
- 27 小林薫氏インタビュー。（2015年1月14日、小林薫氏宅、聞き手：川原健太郎）。
- 28 小林薫氏インタビュー（2015年1月14日）。
- 29 小林薫『花咲く道へ』ふだん記創書34、ふだん記雲の碑グループ、2011年、p.163
- 30 橋本義夫『だれもが書ける文章—「自分史」のすすめ』、講談社現代新書、1978年。
- 31 小林薫氏インタビュー（2015年1月14日）。
- 32 小林薫氏インタビュー（2015年1月14日）。
- 33 小林薫氏インタビュー（2015年1月14日）。
- 34 小林薫氏へのインタビューに際して行った「『ふだん記』インタビューに関するアンケート」。
- 35 金幹子氏インタビュー（2015年1月14日、小林薫氏宅、聞き手：川原健太郎）。
- 36 金幹子氏インタビュー（2015年1月14日）。
- 37 金幹子氏へのインタビュー後の照会（2015年7月）。
- 38 金幹子氏インタビュー（2015年1月14日）。
- 39 金幹子「ふだんぎに救われて」、〈みちのくふだんぎ〉66号、2013年12月、ふだん記みちのくグループ、p.20。
- 40 金幹子「フダングをありがとう」（金氏提供資料、1998年2月25日、69歳時執筆のもの）。
- 41 金幹子「ふだんぎに救われて」前掲、p.21。
- 42 金幹子「ふだんぎの良さを再発見して」、〈旭川のふだん記〉60号、ふだん記旭川グループ、2014年7月、p.85。
- 43 金幹子氏インタビュー（2015年1月14日）。
- 44 金幹子氏へのインタビューに際して行った「『ふだん記』インタビューに関するアンケート」。
- 45 四宮さつき『十年—ふだん記と共に—』、ふだん記全国グループ、1976年、pp.20-25。
- 46 橋本義夫『だれもが書ける文章—「自分史」のすすめ』、講談社現代新書、1978年、p.15。
- 47 橋本和子氏インタビュー（2015年1月14日、小林薫氏宅、聞き手：川原健太郎）。
- 48 橋本和子氏インタビュー（2015年1月14日）。

- 49 橋本和子氏インタビュー（2015年1月14日）。
- 50 橋本和子氏インタビュー（2015年1月14日）。
- 51 朝日新聞（夕刊）、1984年10月11日。
- 52 梶国男「弔辞」、〈ふだん記 雲の碑〉22号、2008年6月、pp.192-193。「ふだん記運動を全国に紹介した坂本龍彦さんを悼む（坂本記者が書いた朝日新聞のふだん記記事）」pp.194-195。
- 53 橋本和子「連翹の花」、〈ふだん記 雲の碑〉12号、ふだん記雲の碑グループ、2003年6月、p.38。
- 54 橋本和子氏インタビュー（2015年1月14日、小林薫氏宅、聞き手：川原健太郎）。
- 55 橋本和子氏インタビュー（2015年1月14日）。
- 56 橋本和子氏インタビュー（2015年1月14日）。
- 57 橋本和子「逆白波のひと 土門 拳」、〈ふだん記 雲の碑〉14号、ふだん記雲の碑グループ、2004年6月、p.139。
- 58 橋本和子「篤姫をめぐる人々」、〈ふだん記 雲の碑〉23号、ふだん記雲の碑グループ、2008年12月、pp.95-97。
- 59 橋本和子氏へのインタビューに際して行った『「ふだん記」インタビューに関するアンケート』。
- 60 張山てる子氏インタビュー（2015年1月14日、小林薫氏宅、聞き手：川原健太郎）。
- 61 張山てる子氏インタビュー（2015年1月14日）。
- 62 東奥日報（夕刊）、1990年8月6日記事。
- 63 張山てる子氏インタビュー（2015年1月14日、小林薫氏宅、聞き手：川原健太郎）。
- 64 張山てる子氏インタビュー（2015年1月14日）。
- 65 張山てる子「橋本先生のお話」、〈ふだん記 雲の碑〉第2号、1998年6月、ふだん記雲の碑グループ、p.123。
- 66 張山てる子氏インタビュー（2015年1月14日）。
- 67 張山てる子「古里紹介」、〈ふだん記 雲の碑〉4号、ふだん記雲の碑グループ、1999年6月、p.48。
- 68 張山てる子「伝統を守る祭の主役」、〈ふだん記 雲の碑〉8号、ふだん記雲の碑グループ、2001年6月、p.27。
- 69 張山てる子「予期せぬ出来事」、〈あいちふだんぎ〉28号、ふだん記あいちグループ、1993年6月、pp.219-220。
- 70 張山てる子「予期せぬ出来事（その三）」、〈あいちふだんぎ〉30号、ふだん記あいちグループ、1994年6月、p.218。
- 71 張山てる子氏インタビュー（2015年1月14日）。

※本研究はJSPS 科研費（基盤研究(C) 課題番号16K04572)の助成による研究成果の一部である。本研究では小林薫氏、金幹子氏、橋本和子氏、張山てる子氏にインタビューを、橋本緑氏にコーディネートをし、橋本鋼二氏に史料提供をそれぞれご協力頂いた。付して御礼申し上げたい。